
ボクらの太陽Django&sabata × 流星のロックマン × ロックマンエグゼ

混沌ソウル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボクらの太陽D j a n g o & a m p ; s a b a t a x 流星のロツクマン×ロツクマンエグゼ

【Nコード】

N 6 8 4 9 P

【作者名】

混沌ソウル

【あらすじ】

イモータルとの戦いが終わってまだ一ヶ月しかたっていない日に二人の戦いが再び始まる。

プロローグ（前書き）

僕の最初の作品です。

プロローグ

―暗黒城オーギュスト跡地―

ジャンゴ（以下：ジャ）「サバタ・・なんでまたこんなところに？」

サバタ（以下：サ）「情報屋によるとここに＜変な光が来た＞と言っていた。だからそれを調べにきた。」

ジャ「変な光？・・それってどんな光？」

サ「たしかく赤紫色の光＞だったそうだ。」

ジャ「赤紫？・・・！それってまさか！？」

？「ふっふっふ・・・そのゝまさかゝですよ。・・・」

不気味な笑い声が聞こえたら上から光が見えた

その光はジャンゴとサバタには見覚えがあつた。

？「お久しぶりですね・・お二方・・・」

サ「お前は・・イモータル・ポリドリ！！」

ジャ「そんな馬鹿な！？お前は確かにエーテルの海に沈んだんじゃ・・・」

ポリドリ（以下：ポ）「ふっふっふ・・イモータルの技術があれば

復活するのも他愛ありません。」

サ「貴様・・・こんどは何をするきだ!!」

ポ「そうですね・・・まずは見せたいものを見せましょう。」

そう言うときポリドリは右手から何かを出した。

ジャ「それって・・・まさか!?!」

ポ「そう・・・以前まで貴方達と一緒に戦ってくれた星霊獣たちですよ・・・」

ジャ「アーシュラ!!リザ!!オトフリート!!トーベ!!」

ポ「呼んでもムダですよ・・・彼らの意識は私の力で封じていますから・・・」

ジャ「お前・・・みんなを返せ!!」

ポ「そうはいきませんよ・・・彼らは今から行つ実験の材料ですから・・・」

ジャ「実験!?!」

ポ「そうです・・・彼らの力を使ってこの世界とほかの二つの世界をつなげるちよつとしたく橋>を作るのです・・・よ」

ジャ・サ「！？そうはさせ・・・」

ポ「もう遅いですよ。」

ポリドリが言った瞬間本人の後ろに大きな穴があいた
ジャ「何だ！？あの穴！？」

サ「まさか・・・あれがそのく橋>なのか？」

ポ「それでは・・・さようなら」

その後ポリドリはその穴の中に入っていった。

サ「おい！まで！！追うぞ！！」

ジャ「わかってる！！」

そういうと二人は穴が消える前に穴の中に入っていった。

プロローグ（後書き）

読んでくれた人に感謝します。

感想を待ってます。

エグゼの世界：始業式（前書き）

プログラグが変だっ たらすみません。

エグゼの世界：始業式

20XX年

「熱斗くん！もう朝だよ！！」

熱斗（以下：熱）「むにやむにや・・・もう後五分・・・」

「何言ってるの！！今日は始業式だよ！！」

熱
「
ん
ゝ
・
・
・
」

・
・
・
ガバ
!
!

熱「ロックマン・今何時？」

ロックマン・エグゼ（以下：エ） 「七時五十分だよ。」

熱「（・・・ハ！！）遅刻だ――！！」

この少年は、光熱斗。見たてはただの寝坊少年だが世界を六回も救ったネットバトラーなのだ。

そして彼とともに世界をすくたのは、彼のネットナビロクマン・EXE<エグゼ>（以下：エグゼ）なのだ。

熱斗が起きて二十分後

まり子先生（以下：まり） 「はい！！じゃあ出席をとりまーす！

じゃあまず・・・遅刻した熱斗君！」

熱「（ギク！）」

どうやら先生にはお見とうしだったようです。

熱「・・・はい。」

まり「熱斗君は廊下に立っっていないさい。」

熱「はい」

クラスの皆「あはははははははははは！！！」

皆の笑い声が教室に響いた

放課後

熱「はあー・・・なんかやることないかなー」

デカオ（以下：デカ）「おい熱斗！お前今暇か？」

熱「ん？今暇だけなんだ？」

デカ「だったらちようどいい！俺とネットバトルしやがれ！！」

熱「おいしいぜえ。俺とロックマンでコテンパンにしてやるぜ！！」

デカ「よっしゃ！！いくぜガッツマン！！」

ガッツマン（以下：ガツ）「いくでガツ！！」

熱「いくぜ！ロックマン！！」

エ「うん！！」

熱「バトルオペレーション！セット！」

エ「イン！！」

二人はそれぞれのネットナビを黒板の電腦にプラグインした。

デカ「まずはこっちからだ！バトルチップ！ガッツパンチ！スロットイン！」

ガツ「ガッツパーンチ！！」

熱「バトルチップ！エリアスチール！スロットイン！」

ガツ「ガツ！？ロックマンが消えたでガッツ！！」

熱「隙あり！！バトルチップ！キャノン！トリプルスロットイン！！」

エ「プログラムアドバンス！ギガキャノン！！」

そつ言ううとエグゼの右手が通常よりも強力なキャノンになって一発でガッツマンをしとめた。

ガツ「ガツーーーー！！」

ガッツマンプラグアウト

デカ「くそー！つぎは負けねー！」

熱「やったぜー！」

エ「熱斗くん・・・いきなりギガキャノンって・・・」

熱「え？・・・そんなのいいじゃん。それよりもプラグアウトするぞ。」

ロ「うん」

そう言うとき熱斗はエグゼをプラグアウトした。

メール（以下：メ）「熱斗！もう終わった？」

熱「あれ？メールちゃん？どうしたの？」

メ「へどうしたの？～じゃないわよ！！授業が終わったらいきなりネットバトルだから！それに今はいしよに帰るって約束してたでしよー！」

熱「あっあゝ悪い悪い。そろそろいくか。」

メ「うん」

そう言うとき二人はいつしよに下校した。

「ふっふっふ……あれが光熱斗ですか……少し様子を見ますか……」

一方そのころ

ジャ「うっうん」

サ「起きたか」

「じゃああれ？サバタ……こっはどっ？」

「サ、さあな。だが今わかつているのはここは別の世界といったところだ。」

ジャ「ふん・・そういえばここの太陽はなんかきもちいね。」

サ「たしかにこんな日差しは気持ちがいい。」

「それはそうと早くポリドリを見つけないと!」

サ「ああ！だがその前にやらなければならないことがある。」

「じゃーん。」

「……おとおとおとおとおとおとおとお」

おおおおおおお!!??.「」

二人は迷子になってしまったようです。

エグゼ：合流（前書き）

ようやく更新できました。
変なタイトルですみません。

エグゼ：合流

―秋原町―

熱「なあメール、これからどうするんだ？」

メ「私は熱斗といっしよならOKだよ。」

熱「そつか・・・俺は科学省に行くけどいいか？」

メ「別にいいけど・・・」

ピロロロロロロ！ピロロロロロロ！

エ「熱斗君！オート電話だよ！」

名人「やあ熱斗君！」

熱「あれ？名人さん？」

名人「熱斗君・・・はんゝはいらないぞ。そんなことより熱斗君、メールちゃんを連れて急いで科学省に来てくれ！大至急！！」

熱「え・・・なにがあつたの？」

名人「話は後だいそいでくれ！！」

プツツ！ツー！ツー！ツー！

熱「炎山！！お前どうして？」

炎山（以下：炎）「俺も名人によばれたからだ。」

名人「三人とも光博士からあずかった物だ。」

三人とも名人から見たことがあるチップをもらった。

熱「これって・・・シンクロチップ！？」

名人「否！！これは今までのシンクロチップとは一味違う。今までのはディメンショナルエリア無しではクロスフュージョンは出来なかったがこのチップはディメンショナルエリアのデータを入れてなるとディメンショナルエリア無しでもクロスフュージョンを可能とすることが出来るその名を『ディメンショナルシンクロチップ』！！」

炎「名人・・・名前長くないか？」

熱「ここは素直にシンクロチップカスタム改つてよばいいじゃん。」

メ「でも私はラッシュチップでやってましたけど」

名人「メールちゃんの場合ラッシュチップを解析して作ったからその辺はだいじょうぶだ。」

熱「よしじゃさっそくウィルスをデリートするぞ！！」

炎「ああ」

メ「ええ」

熱「プラグイン！ロックマンエグゼ！」

炎「ブルース！」

メ「ロール！」

三人「「「トランスミッション！！！！！！！！」」」

三人はそれぞれのナビをメインコンピューターの電腦にプラグインした。

—メインコンピューターの電腦—

エ「うわ！すごい量のウイルスだ！」

ブルース（以下：ブ）「ああ。それだけじゃない見たことがないウイルスもいるぞ。」

ロール（以下：ロル）「でもがんばらなきゃ。」

熱「ああわかってる行くぜみんな！」

三人「「「バトルオペレーション！セット！！」」」

三人「「「イン！！！！」」」

—十分後—

エ「よ・・・ようやく終わった。」

ブ「ああ今回は多すぎたな。」

熱「ロックマン大丈夫か？プラグアウトするぞ。」

三人はそれぞれのナビをプラグアウトした。

熱「にしても誰なんだパパをさらったのは？」

？「ふっふっふそれはワタシのことですか？」

四人「「「「！？」」「」「」

四人の後ろに突如現れたのは赤紫色の光だった。そこから人影のようなものが出てきた。

熱「お前はだれだ！？」

ポ「ワタシはイモータルの一人ポリドリ」

炎「いもーたる？」

熱「ポリ鳥？」

ポ「一樣言っておきますがワタシは鳥ではありません。」

メ「一人ってことはあなた以外にもいるってこと？」

ポ「そうですよ。それにしての驚きました。まさかワタシの送ったウイルスとモンスターをすべてたおすとは」

名人「！？お前の送ったウイルス！？まさか光博士をさらったのは！？」

ポ「そうです。光博士はワタシの手の内にあります。」

熱「パパを返せ！！」

ポ「残念ですがそうは・・・」

？「見つけたぞポリドリ！！」

ポ「！？」

その声のさきに二人の少年がいた。一人は黒衣の服を着た少年。もう一人は無鉄砲のような少年だった。

ポ「おやおや。ここまで来るとは少ししつこいですね。剣士サバタ！銃士ジャンゴ！」

口「え！？」

熱「ジャンゴ！？」

ポ「すみませんがワタシはこれで失礼させていただきます。」

サ「まで！ポリドリ！」

サバタが言い切る前にポリドリはその場から消えてしまった。

サ「クソ!!」

ネロ「落ち着け。今あせってもどうにもならん」

メ「ね・猫がしゃべったー!？」

熱「ていうか羽付けて浮いてる!？」

ネロ「お前らも落ち着け。」

オテンコ（以下：オテ）「ん?・お前は・熱斗!？」

熱「あれ?オテンコさま!？」

ジャ「あれ?オテンコ知り合い？」

オテ「知り合いもなにのこいつはお前の先祖の友人だぞ!!」

ジャ「えー!?!あいつがご先祖の友人!？」

熱「てことはお前はあいつの子孫!？」

熱斗とロックマンとジャンゴとオテンコ以外には何の話かはさっぱりわからなかった。

エグゼ：合流（後書き）

ようやくエグゼと合流したようだ。

そういえば、＜ソルクロスロックマン＞の能力は知らなかった。

そういうことで誰か感想ついでに＜ソルクロスロックマン＞の能力をおしえてください。

エグゼ：合流2（前書き）

数週間ぶりです。

エグゼ：合流2

熱斗とロックマンはジャンゴの先祖とオテンコに二度も会ったことがある。

出会った時にお互いは助け合ってそれがきっかけになって友達になったのだ。

熱斗達とジャンゴ達が会う数分前・・・

―科学省の入り口付近―

ジャ「わぁー大きな建物だな。」

サ「なに寄り道しているんだ？今俺達はここがどこなのかわからないんだぞ。」

オテ「むうー・・・」

ネロ「どうしたオテンコ？」

オテ「なぜかはわからないのだが、私は一度か二度ここに来たことがあるようだ。」

ネロ「!？」

サ「何！？それはほんとか！？」

ジャ「じゃあここはどこ！？」

オテ「すまんがまだわからん。」

ジャ「そうか・・・」

サ「しかしポリドリの奴、いったいどこにいったんだ。」

ジャ「そういえば僕達はどっやってほかの世界を渡ったり、自分達の世界に戻るんだっけ？」

オテ「それなら心配要らない。ポリドリの影響ですべての星霊獣に『世界を渡る力』が使えるようだ。」

サ「つまり世界を渡るときはネロやオテンコの力を借りればいいんだな。」

ネロ「そういうことだ。」

二人（と二匹？）の会話続いている途中・・・

ビー！！っビー！！っビー！！っビー！！っ

ジャ「な・・・何なんだ！？」

アナウンサー「警告！！警告！！科学省メインコンピューターにウイルスが侵入！！繰り返します！（これの繰り返し）」

サ「科学省？・・・さっきの建物か！」

ジャ「へウイルスってなんなんだ？」

オテ「わからん。だが何かやな予感がする。いくぞ二人共！！」

二人「ああ！！」

―メインコンピューターがある部屋から少し離れた所―

サ「しかし今どこら辺なんだ？まるで迷路だぞ」

ジャ「おいサバター！こつちだぞー！」

サ「何！？わかるのか！？」

ジャ「だって地図ここだよ。」

サ「え・・・・・・・・」

ジャンゴが指指す所に科学省の地図があった。

サ「・・・・・・・・」

ジャ「・・・・・・・・」

二人が黙っている間に聞き覚えのある声が聞こえた。

？「ふっふっふっそれはワタシのことですか？」

ジャ「この声ってまさか！」

サ「あの部屋からだな！！」

そして現在とつながる。

このときにはジャンゴとサバタは何かおきたのか話終えたところだった。

エグゼ：合流2（後書き）

なんかごたごたな感じがするなー。というかみじかー！

そういえばあいつはどうしているのかなー（名前は言いませんけど）

感想待ってまーす。

エグゼ：合流3（前書き）

みなさんお久しぶりです。

流星3でオレもついにブラザー持ちだ――（以下：長いので中略）

エグゼ：合流3

熱「そつか・・・仲間を助けるためにこの世界に・・・」

ジャ「ポリドリは自分の為に星の命を食い物にしてきたんだ。」

サ「そしてヤツはまた何かをするために別の世界を利用しにきた。」

炎「そしてそれを阻止するためにこの世界に着たのか・・・」

炎山は少し疑っていた。

それもそのはず、なんせ目の前には見たこともない少年二人と普通はありえない生物が二匹いるからだ。

ジャ「でも・・・そっちも大変だね・・・熱斗の父さんが誘拐されたから・・・」

オ「おい！ジャンゴ！お前の先祖の友人に対して呼び捨ては・・・」

熱「え？ああいいよっさん」とか堅苦しいからっ熱斗でいいよ。」

オ「え・・・いいのか・・・ならいいんだが」

サ「ところでこれからどうするんだ？ヤツ（ポリドリ）をどうやってさがす？」

炎「少なくとも電腦空間に大量のウィルスを送りこんだんだ・
きつとなにかてがかりが・・・」

ピロロッ！！ピロロッ！！・・・ピロロッ！！ピロロッ！！

ネロ「ニヤア？」

サ「ケータイ？なんでつうじているんだ？」

メ「（ケータイ？ずいぶん古い携帯端末をもっていね）」

メールのあたまの中にはジャンゴ達の世界にもPETがあると思い
込んでいる

ちなみに電話の相手は・・・

アリス（以下：ア）「やつほー！アリスちゃんですー！。」

ひまわり娘のアリスだった。（ちなみにスピーカーホンで話かけて
いた）

サ「ひまわりか！お前どうやって連絡を・・・」

ア「んもーせやからわたしは＜アリス＞だって何度も言ってるで
しょー！。」

熱「（ピンクのロン毛に・・・ウサ耳！？）」

ア「あそうそう、どうやって連絡したか、だったね。ジャンゴ・サバタ・・・ペローは知っているよね？」

ジャ「ペロー！？ペローがどうかしたの？」

三人「・・・ペロー？」

三人はペローが何なのかきになったのでオテンコが説明した。

オ「ペローはワタシやネロと同じ精霊獣の一人（一匹？）だ。」

ネロ「そんなもってオレの半身だ。」

ネロはオテンコに付け足すようにいった。

ペロー（以下：ペロ）「我輩がどうかしたのか？」

ちょうど電話の先にペローがいたようだ。

ジャ「ペロー！久しぶり」

ペロ「相変わらずだな。」

サ「お前・・・今何をしている？」

ペロ「いまはお前達に協力している。なんせこの通信は我輩を通して
いるからだ。」

ジャ「えーーーー！！！？ペローを通して喋ってる！？」

ペロ「ポリドリのヤツが世界を渡るく橋>とやらで我輩たち精霊獣に世界を渡る力が宿ったようだ。」

ネロ「なるほどだからこうして通信ができたのか・・・」

ア「詳しいことはまだわからへん。わかったらまた通信するわ。ほな、またな。」

アリスはそのまま電話を切ってしまった。

オ「そういえば熱斗。以前お前にやった私の力をコピーしたチップはどうしたんだ？」

熱「あ・・・あーあれか・・・」

エ「実はPETの世代が変わってくソルクロス>のチップが使えなくなっただ。」

オ「うーん世代交代か・・・熱斗、何のデータも無い空のチップはあるか？」

熱「ん？あるけどこれをどうするんだ？」

オ「それをワタシの後ろに差し込んでくれ」

そう言つてオテンコは後ろをむいた。するとオテンコの後ろに何かが出てきた。

それはなんとバトルチップの差込口だった。

オテンコとネロ以外「「「「ええええ!!」「」「」

オ「どうしたんだ？早くいれんか。」

熱「おっおう（なんか変な感じ）

熱斗は空のチップをオテンコに差し込んだ。

オ「・・・ふん！」

そのあと差し込み口からチップが出てきた。そのチップには太陽のマークが入っていた。

熱「これは？」

オ「コレでロックマンはくソルクロスロックマン>になれるぞ。」

熱「ほんとか！ありがとうオテンコさま！」

熱斗が喜んだつぎの瞬間

ビー！ビー！ビー！

炎「な・・・なんなんだ!？」

アナウンス「アラート！アラート！秋原町の現実世界にウィルスが出現！！繰り返します！」

熱「な・・・なんだって!？」

メ「秋原町にウィルスが!？」

ジャ「ウィルス?それってモンスターみたいなもんか？」

熱「んまあそんな感じとにかく急ごう」

炎「ああ」

メ「ええ」

ジャ「僕もいくよ」

サ「おいまでオレをおいていくな!」

こうして五人(と二匹?)は急いで秋原町に向かった。

エグゼ：合流3（後書き）

・・・オテンコの体どうなっているの？

オ「それは秘密」

秘密かよ・・・

ブ「ふん・・・今回の敵もオレとロックマンの<ダブルヒーロー>で・
」

それだったらジャンゴとロックマンの<クロスオーバー>があるぞ。

ブ「ええ！？」

感想まってまーす。

エグゼ：戦闘（前書き）

数日まえにゾクタイをゲットしました。

エグゼ：戦闘

―秋原町―

そこには大量のウィルスとモンスターが建物を破壊したり人を襲ったりしていた。

熱「ううわ！すごい量のウィルスだな。」

サ「それだけじゃないぞ。どうやらモンスターまでいるようだな。」

炎「とにかく今はあれらをすべてデリートするぞ！」

メ「うん」

ジャ「よし・・・じゃあ・・・あれ？」

オテ「どうしたジャンゴ？」

周りのみんな「「「「「？」「」「」」

ジャ「た・・・太陽銃が・・・」

オテ「太陽銃が、どうかしたのか？」

ジャ「・・・・・・・・・・・・・・・・ない・・・・・・・・」

オテ「なっ！」

熱「えええ！？」

サ「お前まさかなくしたのか！？」

ジャ「いやいやいやそんなこと無いよ！だってこっちに来るときにちゃんと持ってたよ！」

サ「じゃあなんで無いんだ！？」

ジャ「そう言うサバタは！？」

サ「おれはちゃんと・・・・・・・・」

ネロ「サバタ？」

サ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

サバタ以外「（お前もかよ）」

皆が喋ってるあいだにガイコツのモンスターがメールに襲いかけようとしていた。

メ「!?!?きやああああ!!」

熱「メールちゃん!ロックマン!いくぞ!!」

エ「うん!」

熱斗がそう言うのとP.E.Tにシンクロチップを入れた。

熱「シンクロチップ改!スロットイン!」

熱・エ「クロス・フュージョン!!」

その瞬間熱斗の周りをまばゆい光が包んでそこにあらわれたのはエ
グゼと合体した熱斗の姿だった。
クロスフュージョン

熱「バトルチップ!エリアスチール!」

チップの名前を言うと同時に熱斗の姿は消えた。

ジャ「え!?!」

サ「消えた!?!」

熱「バトルチップ!ロングソード!」

気が付いたら熱斗はロングソードでガイコツのモンスターを倒して
いた。

熱「大丈夫か!?!メールちゃん!」

メ「う・うん！（熱斗・・・なんかカッコいい）」

炎「・・・遅れをとったな・・・いくぞブルース！」

ブ「はっ！！」

メ「ロール！わたしたちもいくよ！」

ロル「ええ！」

炎・メ「シンクロチップ改！スロットイン！」

炎・ブ・メ・ロル「「「クロス・フュージョン！」」「」」

そう言うとき炎山とメールも合体した。
クロスフュージョン

ジャ「くっそーこうなったら！」

ネロ・オテ・サ「「「こうなったら？」」「」」

ジャ「オテンコ！」

オテ「なんだ？」

ジャ「合体だ！」
トランス

サ「なに！？」

オテ「それは無茶だ！たしかに合体をつかえばなんとかなるかもしれないがあれは時間が限られている！もし時間切れになったらお前

は敵の的になるんだぞ！」

ネロ「それに二人とも暗黒剣も太陽銃もないんだぞその状態でなにができる！？」

ジャ「それでも・僕はきめているんだ。」

ジャ「へいつも心に太陽を♡♡

オテ「・・・わかった」

ネロ「おい！いいのか」

サ「とにかく今はやるしかない」

ジャ「いくよオテンコ！」

オテ「おう！」

ジャ「たいよー……………う！…！」

ジャンゴの叫びと同時にジャンゴはオテンコと合体^{トランス}してソルジャン
ゴとなった。

エグゼ：戦闘（後書き）

サ「それで武器は何処へやった？」（木刀をもって）

今は言わない。

サ「じゃあいつ言う？」

次回をまで

サ「逃げるな！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6849p/>

ボクらの太陽Django&sabata×流星のロックマン×ロックマンエグゼ

2011年10月8日12時25分発行